阪神淡路大震災の取材映像に学ぶ

大阪代協北摂支部　防災・減災のセミナー開く

忘れてはならない震災
被害大きかった昭和47年以前の建物

大阪代協北摂支部（落合和彦支部長）は、10月22日15時30分から、オンラインセミナー「『都市型震災で何が起こるか』映像に学ぶ減災のヒント」を開催した。講師は、朝日放送テレビ㈱報道局、人と防災未来センターリサーチフェロー、神戸学院大学非常勤講師の木戸崇之氏で、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災の取材映像から見える防災・減災のヒントを紹介した。

木戸氏

木戸氏は、2020年に阪神淡路大震災の取材映像38時間分を公開した活動で放送文化基金賞などを受賞している。

まず、同氏は、災害報道が、命を落とさないための①被害拡大の抑止、②将来の防災・減災、そして、被災者を支えるための、③被災者を勇気づける、④支援を募るといった使命を負っていることを挙げる一方、被災状況をリアルタイムで報道しなければならないマスコミに対して被災者をはじめとする一般社会から批判を受けるといった課題を抱えている現状を述べた。

とはいえ、日本列島は地震災害の多い国である。1月17日、3月11日、9月1日と言えば、阪神淡路大震災、東日本大震災、関東大震災とすぐに思い浮かぶ。しかし、西暦400年頃からの記録に残っている地震被害のあった日を発生日としてカレンダーに示してみると、ほとんどの日が発生日となっている事実がある。木戸氏は、「過去の大きな地震被害でさえ、時間の経過とともに忘れ去られて行く。私自身、阪神淡路大震災もいずれそうなるかもしれないという危機感を持っている。決してそうなってはならない。過去の歴史から、将来も必ず災害が発生することを考えると、防災・減災に災害報道を生かしていかなければならない」と述べた。その中にあって「災害報道に対するマスコミへの批判が強まる以前の阪神淡路大震災は、テレビ局がしっかりと取材できた最初で最後の大震災といえ、教訓となるものだ」と強調した。そのような思いから、木戸氏は朝日放送のライブラリーにある阪神淡路大震災に関する取材映像を今後の大規模自然災害に備える「防災・減災」のために公開する取り組みを行い、『激震の記録1995』としてネット上での公開にこぎ着けた。

映像内での火災のようす

セミナーでは、実際に公開されている映像を使い、木戸氏が大きく①建物崩壊、②火災、避難所等での③食料、④トイレ、⑤助け合いというテーマに分けて説明した。

①建物崩壊では、同じ地域でも損壊度合いに差はあるものの、総じて1階部分の被害が大きいこと、昭和47年以前に建てられた建物の被害が大きく、築年数の浅い建物、耐震補強がなされた建物が強かったと説明。その上で、「築年数の浅い建物、耐震補強がなされた建物でも何回か地震に遭えば〝揺れ疲れ〟が見られる」と指摘し、「建物のメンテナンスとともに、室内においても家具等の倒壊を防ぐために支柱等で支えておくことが大切」と話した。

②火災については、地震発生の翌日に通電火災が発生したケースが多く、家を離れるときにはブレーカーを落としておくことの重要性を述べた。また、10万人の死者が出た関東大震災時は台風の接近で強風であったなど、状況の違いによって被害が変わってくることを説明した。

③食料については、震災直後には配給不足に陥ったこと、不公平が生まれていたと問題点を指摘。そうした中にあって、ある家族が自宅の冷蔵庫に残っていた食料を活用していた映像から、冷蔵庫を耐震補強しておくことも食料確保の一つの方法であると紹介した。

④トイレに関しては、水が流れない事情もあって避難所の衛生状況は最悪で、便座に座れない状態であった映像を紹介し、その対策として、自宅のトイレが使えるのであればビニール袋を活用すれば衛生面が保たれ、他人の目を気にすることなく排便できるといったことを紹介した。

落合支部長

⑤助け合いに関しては、都市部と農村部で差があったと指摘。混乱の大きかった神戸市に比べ、淡路島ではがれきから被災者を救出したのが早かったことや食料不足といった問題が生じなかったとし、その差は助け合えるコミュニティが築けていたかどうかが大きかったと説明した。そして、日ごろから地域で防災運動会を開催するのも一法ではないかと述べた。

最後に同氏は「災害時にあっては、自分で何をすべきかを考え行動することが大事である。映像の公開にあたって出演者から取り下げて欲しいという申し出は一人もなかった。それだけ皆さんは、震災の経験を将来にわたって伝え、防災・減災に生かしてほしいという思いがあったからだと思う」と結び、聴講する代理店等に向かって「この映像を皆さんの活動に有効に活用していただきたい」と呼びかけた。

セミナーは、落合支部長の「本日のセミナーで、改めて災害の恐ろしさを感じた。保険代理店という職業上、災害に備える重要性とそれをお客様に伝える必要性をより感じることができた」との挨拶で終了となった。